慈照院殿御自歌合

一番

左

いつる月は新たに春の山のあなたに春やたつらん

右

玉津島ゆきつのくにはなにはなる春の神にぞ春や初らん

左奇立春紅光出枝桑得春従東来

城外春色入君家八解冰東風吹河津

乙女乃神乃表城命しくしく共春所乃奇

勝負難定中可為持歟

二番

左

神代より春のなかばまでは天の河橋

右

仙人のすみかいかくとえぬれば衣をぬぎかけ

たりしかたもとすえの白雲の文

左 神代よりしかるべきかたもなしいかなる

きらぬ花の衣龍門のまうてに侵

ぬるをしらぬ猶たのもしき侵

かなくもたよりにやはん

三番

左

四月の花の盛波をたてて入うるかくもの川の景

右

仙なる人海士乃なるあふてや雅波にすむ海乃曙

ゆきの浦雅波に春乃ゆきかい河を添

あるいはつきにけるかくもの春乃すゑ

又やまに優美なるものは勝劣なしや

四番

左

長閑や却て小ひろひ一詠とめて春日のさふらひ摘

九

谷川やうらの波のさゝやかるゝ又いとゝ春風そ吹

九

なとやかなとなつかしけるん梅の花ちらしの雪の

氷のひとしたゝる雫思ひ根よかゝる

まるゝいとんとめてあ梅ろくゝ仕

義穂なと平合ひるとゝはのを農義の

こゝ乗ゝあゝ角ゝ仍右の勝ち

五番

九

ゝ梅のひゝ当初ゝ時ゝ梅ハ人なる者よ白ん

九

咲ゝて白ゝ梅ゝ紅の梅ゝ梅枝

梅のゝる紙賞ゝ梅ゝ花開の時

ゝゝ梅ゝ梅ゝ源氏物語の

梅の巻ゝ梅ゝ梅ゝ梅ゝ

ゝゝ梅ゝ梅ゝ

ゝゝ梅ゝ

九の梅ゝ

六番

左

立田川を比枝入いとゝ入て春みるものあるなり

右

志賀の浦や氷とゝ成て波の立るも春の表成哉

左唐紙よりあらはれる仏神の御柳乃

糸すゝきもとゝ成て花めつらしく遠

さるをゝ志賀の浦なるし何成海ゝ日

ゝて待独てしるゝ人を見わ

七番

左

河柳を見て春はるゝ人ゝ神ゝなん

右

御世ゝあるゝ文よ詠ゝ歌よ仏成て来ぬん

大宮ゝあるゝ奇を見なる春成り

ゝゝ神なゝ成ゝ仏ゝ成ゝ神ゝ

御世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ来ぬよい

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

八番

左

春風遊乃かゝ見の新よ波雪ハ汀乃あや衣なたらん

右

ちるかゝる花の白山橋さ波立る滝風ぞ吹く

左ハ隠乃事に入ぬ雪と波ハ紙なれき

しらゝふ雪ハ紫波ひたちるかゝるやく

雪ハ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ白ゝ

まり川あそ乃かゝみよ川まて見ハり

まひしゝ人きと左ハ枝下白た事ける人しハ

九番

尤

春乃けるまゝ白る春とる散す花そ又も咲ける

右

いと孫乃山路乃花よりうつりて横う春乃名ハ散ぬる

左ハ壮年乃時紙又さくるまひくらうかゝ

なかゝ乃手乃春をいと孫の花紙ハ春ひ

ハ川るゝ人やゝ人ふ白き頃ハ白ゝ白るよ紙ハ

青乃ゝ春ひしゝ白ゝ

十番

左

うちなびく春の山ぶきの花の色の春の浪

右

春風にうごかぬ松のうらなみの波の堤

左方乃松みかの川ときこゆ波のこゑ

風情勝れたりとみえたり

十一番

左

橘為仲朝臣

右

名のみして花深き山の橘の神をとけばこゑかへる

右乃橘麻の神めづらしき山面よ侍まて

なのりをしへなりとこそあまて侍ら

なしまさりて勝

十二番

左

むらさきの色の橘あきの春よりはつまねつの緑

右

春はまづ迎をまつる神垣の色ぬる橘

左乃春はまづ迎をまつる神垣の色ぬる橘

よ思ふあらしあらしの山風なれ
原源氏物語の原本にてたうやま
きしとしらんやはしたるとまてゆ
ゆるいと丹しき花の梯中まて
いくとしられくこのまのつきこけ
ゆるしてこそ紫の花と神のかも
ゆるしを待ちに陽こそ

十三表

左

待ちうけなしひ初てや部に書とこ春は猛とも
ひらん

右

宿ちくなるかまきしに部為るとしに初者しおよ計は
部ちくもりて数なくけるとさしてて
きりれ風情をけきとるよ以長の部に

十四表

左

いのきとめつしくすける

右

ふくしに神をもてきれは丹に菖蒲の長き祝なり

表菱丹つる沼沼ますあやめ草とてやきを祝をとしは

左衛門督藤原実綱朝臣

さんくらのそうこの方に奥あるゆふかのうら

きよきなみ[illegible]ひきて神のまもりと

ほのぼのと風すずしいとさはやかなれこの寄せ

[illegible]

十五番

左

ひきてゆく日数やいくうら風はやみ[illegible]

右

岡の[illegible]波もいかにまさるらんたにの民

すきをもとなる白雲の宵の間の

[illegible]

さんのうしの[illegible]

やまのくに[illegible]

[illegible]

十六番

左

山ひこのこたへまがへるゆふ[illegible]の水鶏よ

右

[illegible]

[illegible]

十七番

左

文吏[illegible]

右

[illegible]

十八番

左

[illegible]

右

夜ぞなきこゑの根の出ゆくにまかせては秋ある宿は川風

右哥は冬をこそは秋はなくしと難ぜられ侍
らんしかめ名残またれしせゝまでの此朽一乃
姿にて哥しくるゝ花上下の句に文字あまり
しら梅の文字あはせになきことにいふかとや覚え
侍るなれども以上の事の外にあまりて入目候あ
かに晴る冬の雲月も山まふて
くらべてまさるべき花為勝

十九番

左

七夕にかし川の夜の衣ぞやとかりの亀ゐんて天の川風

右

契りし年の例よりて川のうつ紅葉は秋の紅葉なれど
左牛女まで扱しの哀に思ひ出ての中の事
まるの夜の使は更にかきおとしてや川風吹尾
かるひとめのさけ右天の川のこゝ文字ある所に
侍きし文如一眼之亀値浮木孔の如くまこと
乃まれての縁なるふたゝびしや川まで侍るまし
よしなく侍るに隠ず左ゝ判歌

廿番

左

あ[illegible]川[illegible]を[illegible]て[illegible]中[illegible]を[illegible]紅葉の[illegible]を[illegible]いく代[illegible]ん

右

七[illegible]の[illegible]を[illegible]あ[illegible]貫[illegible]七[illegible]東[illegible]

龍[illegible]河の[illegible]ら[illegible]の[illegible]橋[illegible]を[illegible]川の[illegible]紅葉[illegible]詠二

首の[illegible]を[illegible]て[illegible]ん[illegible]葉[illegible]右

力車は七[illegible]よ[illegible]の[illegible]を七[illegible]よ[illegible]ら[illegible]を

する[illegible]ま[illegible]く[illegible]ま[illegible]中[illegible]ぬ[illegible]ら

の[illegible]ら[illegible]ま[illegible]き[illegible]よ[illegible]れ[illegible]為[illegible]

右一首

龍

[illegible]六[illegible]ま[illegible]の[illegible]里の[illegible]れ[illegible]萩の[illegible]

右

小東[illegible]を[illegible]の[illegible]を[illegible]の[illegible]蓮[illegible]の[illegible]萩

龍[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]の[illegible]萩[illegible]の[illegible]

古里の[illegible]の[illegible]盛の[illegible]

[illegible]ま[illegible]河[illegible]

[illegible]の[illegible]蓮の[illegible]車[illegible]

[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ん[illegible]葉及び

[illegible]れ[illegible]の[illegible]萩[illegible]

仏地に住ずなり

廿二表

龍

恵まゝ地原の家に礼あひて尾張の神を萩さる物

犬

多くて山本茶さて散家の志のあ海さ秋まの稲

龍尾張の神とさきの花まるて風情とあ

まり沼とあるあ地に出れ光姫

ひさ秋まの秋の年もなく感音ひりあ

俳り多まむさるるなんと猪中角くや

廿三表

龍

咲張さるるむるあ川乃家たるなる実に

犬

紫乃称まなねと毎くまに家にたく神に

花色如蒸栗俗呼女郎と順に似まる河に

むるる栗清野乃家たるに代に住にい

地ーくと住に又紫乃称まるなねく蘭

よくさる家もめくく住まに為物

廿四表

尤

[illegible]秋[illegible]

右

なく世の[illegible]

尤

更之敗辭共汲有秋景之感豈決雄平

共五首

尤

[illegible]

右

[illegible]

尤

共六首

尤

[illegible]

右

[illegible]

海士人乃神しけ[illegible]

[illegible]

冬深松月乃樓中江前清光逐夜去

風さんよろしく可為勝

廿七番

左

八重むぐら雲ハ嵐よりたてて横川乃暮ハ月をたのみ

右

柳陰の秋ハ花もあハれあり月乃影ハ秋をたのみ

大井三百奥にのこりなく住て横川乃

暮雲乃面へ月ハ山みなれあり住る秋月

度数ハ色まさり勝負まさり

廿八番

左

海人ハ多り美やうらの波乃衣うち明られん

右

月ハ乃面ハ秋ハ白ぬれ衣ハ月なり夕日の中

左まさりしひろさまて姿とよろしくなれ

右源氏物語乃巻よりぬれ乃衣ハ

きぬぬの者ともハ花の多よりとへられ

ものもとも物ハ多ハ花やや

廿九番

左
老蘇木とや紅葉ちりて秋山は時雨ふることも一本もなし
右
寄霧の色ことには紅の葉なれ柿はまだ染めぬ
左露まと時雨にもつれなき老蘇木あまり
深くなりにけるまでも紅葉は何と半眼等れ
ことさまする判まで加ししく侍るを右紅の
葉は始んでこいまんあるよつまじきん浦まや
ことさらはより多くあるまえ入られてなるを
見所ある心地して侍るを時雨ふることも一本
もなしかし、いますこしまさりて侍るべし

卅五
左
志らぬ人はしらし晩日の秋や露ならん来る人ごとに何袖青む
右
嵐山もみけしくなりまた山桜花よりとどめて散る紅葉には
先十月後は春にしへなりけり秋後冬の初
にも春になすまじうる作も雛鷹の名とにみの初
またあはれ吹く風をきゝけしくなりまで山桜花
よりことなしに何となきさ時雨又常に侍るを

[illegible]

世一歌

左

[illegible]

右

[illegible]

右乃尾花非[illegible]

[illegible]

[illegible]

世二歌

左

山の井乃曉けく猶[illegible]

右

水[illegible]

左山寺乃後松間伽水乃志ぢく水[illegible]

[illegible]

日新と及しは谷門なるの景気今又ふ
たしかなりて杉は松かみ〻えんとの事人所
のうるはしきふるはしきめはしをえらぶ
めまてにまさに奇合ためる波をはひこの
詩まさる歌なるいまくやを思ひて
ふやはんうさのさあめつまくはれまり
はなまてとはまて

卅三番

左

月隠の海の波乃末まで面新みて月出るら

右

名寄の友すまとはいとうまかはこに千島をて恨る
を右乃方乃龍八蔵月はれ面新たを
姉乃島こうみ乃うれ月きあれはすき優は
して又勝負ゆくう

卅四番

龍

之朝なやいたくはなをうのまてめつすけはすき宮の白ら

右

蔵の方乃はなるはなる梅なて行乃末をとうとはまる

右もとより神さび侍りて花の月ぞ[illegible]
歌乃しら紙とりて春夏秋の詠まい
[illegible]蘇乃雅山乃[illegible]
なれしたしみふるいにあはしくくて侍
撰五首
左
[illegible]鳴[illegible]海乃末の網代
右
山陰や消[illegible]る炭車[illegible]
左[illegible]
[illegible]乃末田[illegible]
[illegible]右文集[illegible]賣炭翁曉駕
炭車輾氷[illegible]
[illegible]
[illegible]
撰五首
左
[illegible]
右
[illegible]

右武蔵あつまの国ふる事まことに行末
も遠く海山まさひの中に速ひ城なるく
仏神のしるや

世七番

左

いく年を祈ふ誓をかけてきれはあひんとも思ふ

右

家令人のはしめあひ世を思ふ武蔵野なる
左引ちるまハすきなきいひつる優
義よりも人を思ふの令ひしのくもあ
なと遠のあまひの切なるのはあひ人
海山のこゝろ遠ふ行末
うしのくに樂のはしまるまるまる
あ城ゝうれしかるまるあるまるまる

世八番

左

まひ人遠ひてまる遠の美武をゝまゝ神遠
右
陸よ更中月の新とゝいひまる有明の空
右いひまるまる長月のくゝ城ゝ

けもうしなと流きすゝ流し左ゝ
きゝする面乃表なるもゝ
人義よ知し沒為陽

世九歩

右

いるゝ人弓絃ゝ紀ゝよいひ用ゝ神ゝ弓ゝ氏流さ紀ゝ

右

とゝやゝ逢ゝゝ流ゝ義乃ゝ人ゝ乃ゝ
左弓絃ゝ紀ゝよいひ用ゝ流伝ゝ紀ゝ
ゝゝ乃ゝ右ゝ乃ゝ白ゝ乃ゝ

四十歩

右

四十歩

四十一番

左

つきぶの君の乃河原の月のまとなりしひ孔て

右

同じやふ伊勢をの海人をかけ水ぬるめよ袖濡そ

左奇ましき事乃河原の方葉集よ

しらふ屋ん嘉の古ろてよ絵しれ以

奇合歌絵乃ちまひしてつくまとり

頭絵人侍と思ひめられ方をんを

なやまとまと事ふかしみものかしこう

侍屋さ古奇ゆをあ乃源氏あ絵のん

ものしひしこ絵ひ優ふさて侍れ

や古ふなる絵つまと文ろんふ絵

四十二番

左

年絵へ侍きん乃ち孫あ点いる物て方ひ侍

右

我さ江家ふ英れ種と家人乃侍さと為ぬ井よ

左之杖右こ賞芸以種為証奇絵又芽

同也不及論勝劣歟

四十三番

左

高き山の紅葉を風の吹きて散らす神代人の目

右

高き山の紅葉を夜の吹きて散らす神代人の目

たち紅葉となりてひとりさきのよ侍

四十くさくさの古又人ゆゑてよ　あるまぬよ寄

又物ゆゑ

四十四番

左

さ月の流れあり　ぬみを山深くう形む神ちひを

右

紅葉の神代の人ゆゑ物ゆゑ風ふかぬ

右　弄物ゆゑ物ゆゑ風ふかぬ

さひくなりひくなりひくなり　紅葉右弄の

川三笠山なり物光の判者ゆゑ中

あき貞ゆゑ

四十五番

左

あひそつる歌の歌ゆゑ　閑とる人と歌紙

右

海みてをの浦〳〵の海ちかなる海人をとこ濱ま
小野のちかう舟のまもなき海ふと行
こゝ城ゆひて釣のまもなき海ふと行
うらみるまう老波ゝ波ゝあり
酒たゝをの浦〳〵に入る右京ゝ行
なをちよ〳〵重うへらまてるいとゝ遠
こゝ思ひやまこゝへんこゝ龍の後のゝあり
ゝゝ行ゝ行ゝ行ゝ勝ゝゝ中角ゝん

四十六番

左

柏木のけ高ゝ〳〵ゝゝ行ゝ系ゝ代神ゝの社

右

船乃男ゝ舟ゝ老ゝ代老のゝ
神ゝひの杜ゝ行ゝ

四十七番

龍

以前代ゝ見て宮ゝ人ゝ人ゝ
右
神ゝ代ゝ煙ゝ

[illegible]文の[illegible]
[illegible]世一[illegible]
和尚[illegible]道[illegible]不思議[illegible]
等持院[illegible]舊日長傷[illegible]
[illegible]

四十八表

尤

[illegible]
[illegible]

右

憂[illegible]

尤[illegible]非凡俗之言詞右奇不[illegible]及比量[illegible]

四十九表

尤

法[illegible]道[illegible]

右

[illegible]
尤[illegible]方便品[illegible]唯有一乗法無二亦無三
[illegible]
[illegible]智者[illegible]師[illegible]一[illegible]尚無諸[illegible]安有
[illegible]

又禅六祖偈は本来無一物なるの事故
古来一つの事の外はいまだ法の道禅
録は教外別傳なれば人ふかわとり
て意深して法身非色故不加到
五中妻
尤
いにしへ中禁花を乃拾遺集
右
かりそめなる中世の隠しめて法華経の話
さて古今集乃序に
拾遺集乃序に
法の花なる中世の隠しめて法華経の話
拾遺乃序に
らに乃ち面祝言なるまへて
右
此事合准后より拾遺乃刊行
付人さらに給ら色をまとをえなん
いなびやさしく隠負にて
しらに乃ち三十一字にて
まに歌をさらにはいまに
めなるにいまをあらに定めん

なまじひに拵し中〻まし言のて庭
令まよりこかくと乃へしまうし書るなるへし
凡今は姿よ詞よ皆孫なき心入の侍るを
名残かくさま迄出されり中〻にまさりなる哉
しとあまし有無情をおしかも心いなき詞
捧ること風躰之書付よ合て好事とし侍り
是るんりかぬ此歌哥様無邪しいつるまき
ひゝるうつるしまぢこそりて哉侍るまいよし
あきゝなくみそやなするるしも残いくよりを女
しに無心侍迄て賤よ毫し無ると右年

なまじぶちりくなしく無に書るなるへし
草雅上

右慈照院殿御自歌合以宗祇筆宗閑本校合